

菜の花

昔、福岡のある「むら」に皮すきの庄七という若いもんがおった。

体が岩のようにじょうぶで、宮ずもうの小結までとった男だった。庄七は、「むら」一番の働きもんで、一日の仕事の後は、いつも本村の酒屋さんから好きなお酒を買ってきて、一人で飲んでいたという。

昔は、「むら」のもんが本村の酒屋さんにお酒を買いに行く時は、ウチアケ酒と言って、ドンブリを持って行き、そのドンブリにマス酒を打ちあけてもらって、家に持ち帰って飲まねばならなかった。

本村のもんは、みんな店の中で楽しくカクウチ酒を飲んでいて、酒屋さんのマスの角から、ぐうーっと一息に飲み干す、お酒の飲み方があるだろう、あのおいしそうな飲み方だ。

しかし、「むら」のもんは、店の中に入れてもらえないので、ウチアケ酒を買ってきて家で飲んでいて、これが、お上の定めた厳しい作法だった。

庄七は、いつも本村のもんのカクウチ酒を見て、「おれも にんげんばい。いっぺんだけでよか、あのカクウチ酒を飲んでみたか」と口ぐせのように、言っていた。

ある日、庄七はいつものようにウチアケ酒を買うふりをして酒屋さんの前に立ち、そこで謀反（おほん）を起こした。

わしら「むら」のもんは、店の中に入れなかったのに庄七は酒屋のついできたマス酒をさっと取り上げて、ぞうり足でつかつかと店の中に入り込み、仁王立ちのまんまカクウチ酒をやってしまった。酒屋の主人はたまげてしまい、「この悪党が、悪党が・・・」と言って店の隅でふるえていた。

さあ、この話が広がってしまった。

「皮すきの庄七ていうもんが酒屋の敷居をまたぎ、店の中でカクウチ酒を飲んだそうな。なんて大それたことをするんじゃろうか。きっと、お上からトガメがくるぞ」と言って国中の大評判になってしまった。それに、酒屋の主人が、福岡の奉行所に訴えてしまったので、たちまち捕り手の役人がやって来て庄七を捕らえて行ってしまった。

たったカクウチ酒を飲んだだけなのになあ。

それからしばらくたって、庄七が獄門にかけられる日が来た。佐賀の方から斬り手のサムライがやとわれてきて、本村の庄屋さんの方に泊まった。

ところが、その夜に、床の間においてあったサムライの刀が、コトコト音をたてたので、家のもんはおそろしくなってちっとも眠れなかったそうだ。

あくる朝、「むら」の川原に、庄七が役人から引っ張って来られた。

庄七は、もうその時は、首が切られることを覚悟していたから、むしろの上に乗る時、役人や酒屋の主人をぐうっとにらみつけた。

斬り手のサムライが、刀をすうっと抜いて、手桶の水をかけながら、「何か言い残すことはないか。」と情けの言葉をかけたら、庄七が「むら」の方に向き直って

『おれは「むら」で一番にカクウチ酒ば飲んだけん、死んでもよか、しかし、この仕打ちは忘れんぞ。酒屋の酒はくさらせ、屋敷は菜の花畑にしてやる。さあ切ってくれ。』

と言って、着ていた着物を、ぱっと脱いで裸になった。刀がぴかっと光ったと思ったら、庄七の首がころころと転げて、水のふちでとまった。

血が、川のはしっこを赤くながれていったという。

この後、七つもあった酒蔵のお酒がたびたび腐ったり、店の者が不思議な病気に罹ったりして、とうとうその酒屋はなくなった。その後は、庄七の言っていたように一面菜の花畑になってしまったということだ。

(松崎武俊「部落の語り伝え」より)

※一部、方言の表現を修正しました。

